

健康文化

観鳥紀行

高田 健三

一昨年(2000年)の2月の末、渥美半島の伊良湖に近い所にある初立ダム湖の、カモについてのニュースが目にとまった。越冬していた4000羽のカモが渡り始めたというのである。早速、クルマを飛ばして行ってみると、湖面には数十羽ほどしか見当たらない。ニュースを見てから数日たつので遅かったかと思った。たまたま湖畔の公園を手入れしている人達に訊ねると、「昨日、最後の群れが旅立ちました」という返事が返ってきた。“旅立ち”という言葉に何とも言えない暖か味を感じた。遠きにある彼らの故里を思えば長い旅路である。優しい思いやりが伝わってきた。カモの大群は見られなかったが、その一言は、無駄足になったことを忘れさせるのに十分であった。渡り鳥を観るのにはタイミングが大切であることを、愚かにも今更ながら思い知ったのはこの時である。

冬の訪れとともに渡り鳥たちが、北の国からやって来る。日本の冬の風物詩である。そんな中、それっということ急遽新潟に飛んだのは、一昨年(2000年)の11月の末であった。瓢湖に数千羽のハクチョウが渡来していると聞いたからである。カモのこともあり、決断は速かった。とはいえ、本来、寒さが苦手の私が、北国の冬ということ怖じ気づくところを、家内に背中を押されてのことであった。それに厳冬になって雪が深くなると、行動の自由が束縛されることも、もう一つの理由であった。

レンタカーを受け取って新潟の街を出発したのは3時半ばを回っていた。ハクチョウの湖、瓢湖は新潟市の南東約15キロの水原町(すいばらまち)に位置している。短い冬の日が暮れはしないかと、地図を頼りにクルマを走らせている間も、気が気ではなかった。初めて目に映った瓢湖は意外に小さかった。湖という字のイメージから想像していたのとは異なって、池という感じの方が近いはずまいである。湖畔にある管理事務所には、只今、5000羽という標示板がかかっていたが、湖面を見た感じでは、とてもそんなにはいない。昼間は餌をとり、周辺の田圃に散らばっているという話は聞いていたが、夕陽も沈みかけているのにどうしたのかと思い、管理事務所の人に尋ねると、空を指さして、続々帰ってきますよという。見上げると、あちらこちらの方角から、一杯に広

げた羽を夕陽に染めつつ、あるいは、茜色の雲を背景に、シルエットとなって数羽ずつの群れが、次々に降下してくるところであった。水鳥特有の水掻きを揃えて前に広げ、ショックを和らげて着水する様子には、一日の仕事を終えて無事帰宅(巣)したという安堵感が漂って見える。

聞けば、群れはそれぞれの家族単位なのだという。二羽は夫婦のつがい、三羽、四羽は子供連れといったところである。一羽だけのものは、連れ合いを亡くした寡婦(夫)か、単なるあぶれ者か、今流に言う、独身貴族、あるいはパラサイトシングルかと想像も広がる。屈託なく泳いでいるハクチョウを見ていると、人の浮き世に比べ鳥の世界は平和に見えてくる。その鳥の世界に、一度つがいになると、その雌雄の組み合わせは終生変わらないという定説があった。ところが最近の研究から、つがいの相手は変わらなくても、母鳥は結構浮気をしていることが分かってきたらしい。昔聞いたフランス小話に、子供の父親は、母親と神のみぞ知るといふのがあったようなことを思い出した。

そうこうしているうちに、夕闇も濃くなり、寒さが骨身に滲みてきた。もつと沢山の集団を期待して、わざわざ名古屋から来たことを詰め所の人に話すと、それならば、餌を探しに飛び立つ前の午前6時頃に来ると良い。しかし、相当に冷えるので懐炉などを身につけることなどアドバイスをしてくれた。その日の泊まりは近くの月岡温泉なので、クルマを飛ばせば10分ほどの距離である。朝食前に充分時間があるではないかと思ひ、出直すことにした。

11月末の朝6時頃といえばまだ暗い。それに、気温も一日のうちで最低になる時間帯である。翌朝は“決死の覚悟”の“観鳥行”となった。我々のは“探鳥(バードウォッチング)”という本格的なものではない。とはいっても、湖畔に着いてみると、我々二人だけで他に人影はなかった。これでも熱心な方なのかもしれない。暗がりの中、目を凝らして眺めてみると、いるはいるは、無数のハクチョウが、湖面や州を埋めるようにして眠っていた。平和な休息である。東の空が白みかけてくると、一羽二羽と、水面を駆けるようにして飛び立ち始めた。今日もまた、彼らの一日が始まったのである。宿に戻り冷えた体を温泉でほぐし、朝食をすませたのは9時に近かった。ハクチョウの大群をこの目で確かめたせいか、気分も壮快で、我々も次の目的地に出発した。

その翌年、2001年の1月、ハクチョウの観鳥行に味をしめた我々の目に、一万羽のツルが飛来しているとの新聞記事が映った。鹿児島県出水市の“ツルの里”がその場所である。大正10年に国の天然記念物に指定されたというから、瓢湖のハクチョウより30年以上も歴史が古い。大群の飛来地は、今ではここだけであるという。鹿児島県ならば雪の心配もないだろうと思ひ、1月末にツルの

観鳥行に出かけることになった。

ツルを中心にしたスケジュールの関係で、初日は神話の地、高千穂河原を訪ねることにした。季節柄、団体客もなく、抜けるような青空の下、歩く自分たちの足音さえも、砂地の地面に吸い込まれるような静けさであった。我が国創世の原点といわれる空間に立つと、目の当りに悠然と聳える天孫降臨の地、高千穂の峰は、その場の総てのものを抱え込むように広がっていた。特徴のある峰の形、岩肌の色のせい、暫し、神話の時代にタイムスリップしたような不思議な気持ちになった。これもツルのお陰なのかもしれない。駐車場から往復の途中に出会ったのは熟年と若者の二組だけであった。その一組の若いカップルが、天孫降臨の解説板を一心に見入っている姿が、妙に印象的であった。

翌日はいよいよツルの里である。ハクチョウの瓢湖を探すのには苦労したが、今回驚いたことは、328号線沿いに出水市に近づくと、道の両側にツルのブロンズ像が立てられていて、道路標識にも、地名と同じ大きさで、“ツルの里”の案内が書かれているのである。瓢湖のハクチョウとの扱いの違いは後になって分かったのであるが、ツル様様という街の雰囲気はみなぎっていた。

目的地に着くまで、我々には一つの心配事があった。瓢湖のハクチョウは、昼間、湖には少数しかいなかった。そのため寒さの中、朝駆けの辛い思いをしたからである。ツルも同じような条件であるとする、大群を見ずに終わる可能性があった。スケジュールの都合で、当夜の泊まりは天草にとってあったため、“夜討ち朝駆け”のような芸当は出来ない。2階建のツル展望所が視野に入ってきて、道沿いの田圃にも餌を啄むツルらしき鳥さえ見当たらない。ツル観察センターの駐車場で、チケット売り場の女子職員が、今、沢山いますよと言ってくれたのも、気休めにしか聞こえなかった。祈る思いで階段を上り、期待と不安の思いで窓際に近づいた時、思わず“ワーオ”と声が出てしまった。視野一面に広がる田圃に、“万羽ツル”がいたのである。大型のマナヅル、ナベヅルの他クロヅルなどの大群は、一万数千羽を数えるという。

よくテレビの自然紀行などで、ペンギンの大集団や、島を覆い尽くす海鳥などの映像を見ることがあるが、現実に生き物の大群に面と向かうと、生命力の迸りというかオーラというか、生き物の間に通い合う何かの存在を実感した思いであった。

ツルセンターの解説によれば、毎朝800kgの小麦を与え、更に3月に入ると、煮干などを加えて、北帰行のための体力づくりをしてやるという。餌代や田圃の借地料等、国などから3000万円ほどの補助が出ているとのこと。それに比べ、瓢湖のハクチョウは、水原町と“瓢湖の白鳥を守る会”が保護活動の主体とな

っていることもあって規模は遙かに小さい。しかし環境条件を考えると、瓢湖の方が自然に近いように思われる。どちらの保護策が鳥自身にとってよいか、簡単には決められそうにない問題である。バードウォッチングといってもそれなりの知識をもってかからなければ、自然の鳥に接する意味がない。その点、動物園と異なって、このような渡来地が、野生動物の一般的理解に重要な役割を果たしていることだけは間違いない。

この正月、久しぶりに名古屋大学時代の友人達が訪ねてきてくれた。ワインも手伝って大いに盛り上がった。その中の一人、小笠原昭夫さんは、有力な日本野鳥の会会員であり、環境問題や大学での教育など幅広く活躍中である。彼によると、我が国の自然についての関心は、先進国に比べ希薄であるらしい。例えば、我が国の野鳥の会会員は5万人程であるが、バードウォッチングの元祖のイギリスでは40万人、アメリカでは20数万人を数えるという。中には脚輪をつけて、生態調査に協力することを誇りにしている人もいるのである。

私の観鳥行の話から、渡来地での鳥の密度が話題になった。密度が高くなれば、感染症が発生した時の被害が心配される。出来たら、餌付け場を分散させることが必要なのかもしれないということである。野生動物と人間との住み分けは、益々難しくなってきたきそうである。折角の美しい来訪者である。長く付き合うには、人間の側の努力が更に必要である。

ハクチョウは、大柄な鳥であるが、水面に浮かぶ姿は優美そのものというか、妖精にも例えられる。この冬、北海道大沼公園でたまたま目にしたハクチョウは、蝦夷駒ヶ岳を背景にした沼の水面を、滑るようにして湖岸の林の陰に消えていった。遠景が似合う鳥である。ドイツのノイシュヴァンシュタイン城(白鳥城)も近景より遠景の方が美しい。チャイコフスキーの舞踊組曲“白鳥の湖”が、幻想的な舞台で世界中の人々を魅了してきたのも、主人公がハクチョウだからである。

一方、ツルは、小説のはじめともいわれるデカメロンの中に、頓知のねたとして登場するが、我が国ではツルといえばタンチョウである。優美にして長寿の霊鳥とされている。民話を基にした木下順二の名作、“夕鶴”は、優しくも哀れなツルと人との交流を描く。ツルの化身“つう”は、我が身の羽を犠牲にして美しい織物を織る。タンチョウヅルの端麗な姿が一層の哀れを誘う。どうやら次なる目的地は、雪原で舞うタンチョウヅルを求めて、釧路湿原になりそうである。(平成14年1月)

(名古屋大学名誉教授)